

ぜんほきよう NURSERY

2025

9

SEPTEMBER

No.389

特集

外国籍の家庭への支援を考える

保育ネットワーク

社会福祉法人岡山こども協会 さくらんぼ保育園 (岡山県赤磐市)

ありのままの自然のなかで、価値を生み出す力を育てる 8

人口減少時代における保育のあり方 (第6/11回) 10

国の動き 12

ぜんほきようの動き 12

公立保育所・公立認定こども園等の動き

玉名市立伊倉保育所 (熊本県玉名市) 14

保育現場における労務管理 (第6/11回) 16



ありのままの自然のなかで、 価値を生み出す力を育てる

社会福祉法人岡山こども協会 さくらんぼ保育園（岡山県赤磐市）

2001年に赤磐市^{あかいはし}の桜が丘団地に開設されたさくらんぼ保育園。同園を運営する社会福祉法人岡山こども協会は、同地域で2つの保育園を運営していましたが、団地への入居者が増え、受け入れ人数を超えたため、同園を開設しました。同法人は赤磐市で現在11の福祉関連施設に加え、3つの保育園と2つのこども園を運営しています。

さくらんぼ保育園の園庭にはサクランボやサクラなど多くの木々が茂っています。6月にはサクランボを収穫したり、秋には落ち葉でベッドをつくったりと、自然とふれあいながら0～5歳の園児77名がのびのびと成長しています。

カテゴリーⅢ 多様な連携と協働をつくる

⑯地域に根ざした保育所・認定こども園等として、地域と連携して実情を把握し、子育て家庭を支援する資源の活用や連携を充実します。

遊びのなかから学びが生まれる 「わくわくの森」事業

一人ひとりを大切に、子どもに寄り添った保育を行うさくらんぼ保育園。保育活動のなかでは、「観守り保育」に注力しています。「観守り保育」に「観」を使うのには意味があると、池田裕樹園長^{いけだゆうき}。「子どものしていることの意味をとらえ、その行動から心理を悟り、子ども自身が考えて行動できるように支援することをめざしている」と話します。

そんな同園を運営する岡山こども協会が取り組むのが「わくわくの森」事業です。5年前に同園から徒歩10分ほどの距離にある約1万4000㎡の雑木林を購入しました。アスレチック遊具などは置かず、ありのままの自然を生

かして遊べる場にするために開拓中です。同法人の私有地ですが、誰でも利用することができるようになりました。

きっかけは、齊藤歩^{さいとうあゆむ}理事長が、子どもたちが自然とふれあう経験が減ってきていることを実感したことでした。ある時、子どもたちに触ってもらおうと、セミをたくさん捕まえて園を訪れましたが、子どもたちの多くは間近で見るセミの姿に躊躇^{ちゅうちょ}し触る勇気がありませんでした。自然とふれあい、遊びのなかから学びが生まれる場をつくりたいと考え、たどり着いたのが



池田 裕樹 園長



齊藤 歩 理事長

「わくわくの森」でした。地域の方にも事前説明会で賛同を得ることができ、環境整備にも参加してもらえるようになりました。これまでも「わくわくの森」では、親子での秘密基地づくりやネイチャーゲーム、たき火体験などを実施しています。

そんななか、ある日「わくわくの森」の中で、昔使われていた備前焼の登り窯の跡を発見。そこに埋まっていたレンガを集めてピザ窯をつくる案に子どもたちが賛同し、レンガの掘り出しが始まりました。ピザ窯づくりに必要なレンガは100個。ひとつ4キロのレンガを子どもたちが自分で掘ってはリュックに入れて自分で園に運び、全部掘り出すのに2か月かかりました。このような保育に発展することがまさしく「わくわくの森」がめざすことだと齊藤理事長。「今の時代は自分で問いを見つけて、答えを探す力が必要になってきています。そういう力を育てるためにも『わくわくの森』で、自分たちで遊びを見つけて、価値を生み出していく体験をしてもらいたい」と話します。



掘り出したレンガは、ひとつずつ子どもたちが自分のリュックで背負って園まで運び、みんなですべて洗ってきれいにする



レンガ工場を訪ね、掘り出したレンガが耐火レンガだと確認。ピザ窯づくりのアドバイスをいただき完成した窯で、子どもたちが自らピザを焼く！

今回お伺いしたのは 社会福祉法人岡山こども協会 さくらんぼ保育園 (岡山県赤磐市)

施設基礎データ (令和7年8月1日現在)

定員	70名 (現員: 77名) 0歳児7名、1歳児10名、2歳児12名、 3歳児17名、4歳児15名、5歳児16名
職員	職員22名 園長1名、主任1名、保育士12名、栄養士1名、 調理員2名、事務員1名、保育補助員4名
事業	延長保育、障害児保育



カテゴリーⅡ 子育て家庭を支える

- ⑪すべての保育所・認定こども園等が地域子育て支援を展開します。

無償の「学力サポート事業」で子どもたちの格差を減らす

同法人では、10年以上前から小学生向けの無償の「学力サポート事業」を行っているのも特徴です。小学校や保護者と連携を取り、元教員や大学生など有償ボランティアの協力を得ながら、毎週土曜日の午前に3時間実施。塾に通っておらず、勉強につまずきを感じている子どもが対象です。保護者の気持ちや小学校の先生の意見もうかがっています。宿題を見る以外にも、絵本の読み聞かせや科学実験など、「学ぶことはおもしろい」と勉強自体に興味をもってもらうための取り組みも行っています。きっかけは、齊藤理事長が学童指導員だった頃、家庭の事情によって子どもたちの学力に格差が生まれていると感じたことでした。子どもたちに未来は自分でつかみ取ることができるものだという気持ちをもってほしいと考え、同事業を始めました。また「学力サポート事業」ではありませんが、子どもにとって安心できる場所、人、時間を提供する「第3の居場所」になりたいという思いがあると、齊藤理事長。法人として保護者にも、誰かが助けようとしてくれていると感じてもらえるような社会をつくりたい、と考えているそうです。

研修や事業を通じて、「大人も育つ」場をめざす

同園が人材マネジメントで重視しているのは、こまめに面談をすることです。年4回の定期的な面談のほか、悩んでいることがあれ

ばいつでも相談できる体制を整えており、それが離職防止につながっています。また同法人ではオリジナルの研修を実施。北海道の礼文島研修では、初対面の人とチームを組み、宿泊施設主催の10時間のトレッキングコースに挑戦します。見ず知らずの人と厳しい体験をすることで、新たな価値観に出会い、人間力を高めることを目的としているそうです。法人の理念には「大人も育つ」ことを掲げていると齊藤理事長。「研修やわくわくの森事業を通じて、職員はもちろん、保護者や地域の方など大人も育つ場にしていきたい」と語ってくれました。(取材日2025年7月17日)



学校での学びの補習を中心に行う「学力サポート事業」



「学力サポート事業」では、絵本の読み聞かせなど学びへの関心を高める取り組みも実施



「わくわくの森」で秘密基地をつくる。土台部分の大きな木はみんなで力を合わせて運び、小さな枝は屋根や壁に。運ぶ係、積み上げる係など、子どもたちはいつか自然に役割を分担しはじめる。秘密基地は11月に完成する予定!

※本文中の「カテゴリー」および丸数字は、「全保協の将来ビジョン」に基づき、関連のある項目を記載しています。「全保協の将来ビジョン」は右記全保協ホームページからご覧いただけます。

